

研究成果の紹介

大豆の難防除雑草の徹底防除が可能な除草剤施用体系

大豆の難防除雑草に対して効果の高い除草剤の施用体系について検討した。大豆播種前から5葉期以降にかけて、除草効果の高い除草剤の全面及び畦間・株間処理と豆茎葉の被陰力を組み合わせることで、難防除雑草を収穫期まで強く抑えることができる。

内容

近年の大豆作では、ホソアオゲイトウ、ヒロハフウリンホオズキ、帰化アサガオ類などの難防除雑草が収穫期まで繁茂して、収穫作業能率の低下や収量・品質が著しく損なわれる事例が増加している。そこで、コンバイン収穫に適した狭条密播栽培において、上記草種の徹底防除に適用可能な除草剤や薬剤処理方法を検討したところ、以下の結果となった。

(1)イマザモックスアンモニウム塩液剤・大豆出芽揃い期・全面処理：処理時の雑草葉齢が2葉程度であれば、いずれの草種も枯死あるいは強く抑制する。土壌処理効果は低い。

(2)ベンタゾン液剤・大豆3～4葉期・全面処理：いずれの草種も黄化症状や生育抑制がみられるが、枯死せずに再生する。

(3)グルホシネート液剤・大豆5葉期以降・畦間株間処理：薬剤の付着した雑草は枯死する。大豆茎葉が被陰していない裸地部分でヒロハフウリンホオズキや帰化アサガオ類が再発生する。

なお、フルチアセットメチル乳剤を大豆4葉期

に全面処理すると、ホソアオゲイトウ、ヒロハフウリンホオズキの幼苗に高い除草効果が認められる。ただし、帰化アサガオ類は一時的に落葉するものの、生育が回復、繁茂する。

いずれの薬剤も、大豆茎葉に被陰されていない部分では雑草の再発生が顕著で、防除効果の維持には大豆茎葉の被陰力が重要である。一方、イマザモックスアンモニウム塩液剤は、帰化アサガオ類のつる伸張を強く抑制する。これらの結果から、播種前から大豆5葉期以降にかけて、図に示す徹底防除体系を構築して現地圃場で実証した。その結果、帰化アサガオ類を含む難防除雑草の再発生はみられず、収量が回復した。

普及上の注意事項

現状では、帰化アサガオ類に対する土壌処理剤や選択性茎葉処理剤の除草効果は低い。徹底防除には非選択性茎葉処理剤との体系処理が必須であり、防除効果が十分に発揮できるよう適切な時期に薬剤処理を実施する。

牛尾 昭浩（農産園芸部）

（問い合わせ先 電話：0790-47-2410）

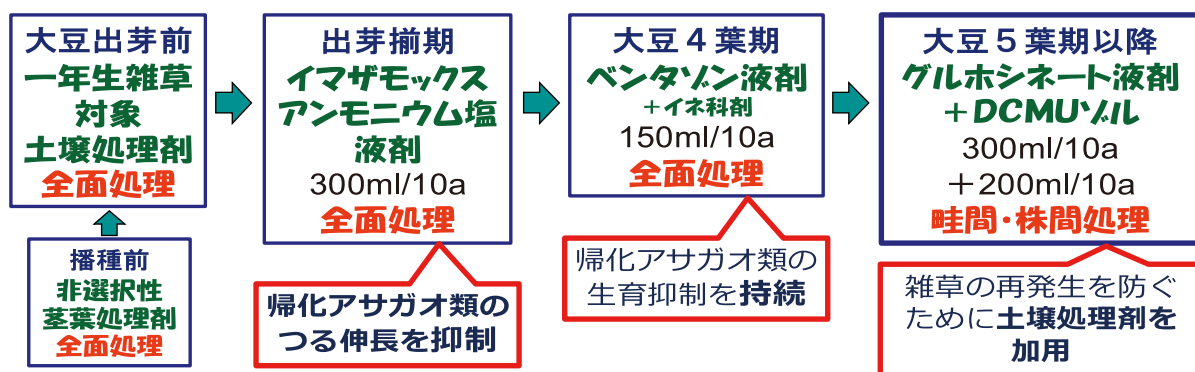


図 帰化アサガオを含む難防除雑草対象徹底防除体系（条間 40cm 狭条栽培対応）